

あちこち傷んでいたそのピアノは、半年後に見違えるような姿で自宅に運ばれてきた。ピアノそのものの美しさに魅かれたこともあるが、そのままでは朽ちていくばかりのフランスの文化遺産を蘇らせようとする、パリに生きる若い2人の職人の姿に打たれたことも購入の大きな動機であった。

彼女たちの修復したピアノは、日本にもファンが多い。サイトで知って注文したり、直接工房を訪れて購入されたものが、すでに10台近く海を渡った。明子さんは一時帰国の際には、時間の許す限り日本各地の顧客を訪ね、自分の手がけたピアノに再会するようにしている。

「一流メーカーがしっかりと作った良質のピアノは、良い状態で維持されれば必ず、人々に深い満足を与えるはず。そうやって個々のピアノの主張する音楽的な遺産が、世界中に受け継がれていくと、私たちは信じてるんです」

### 自分の信じることを尊重する仕事

パリ在住のレイコ・クルックさんは、特殊メーキャップ・メーキャップデザイナーという新たな創造の境地を開き、世界的な評価



を得てきた。そして近年はその枠を超え、彫刻、インスタレーション、オペラの舞台美術など、活動の幅を広げている。「日本人であることは、ことさらに意識してこなかった。その前にひとりの人間として、高貴な存在であろうとした」。そう語るレイコさんは、日本を離れて30年以上経つにもかかわらず(あるいは、だからと言うべきか)、実に美しい日本語を話す女性であった。2回にわたるフランス特集のまとめとして、芸術と創造という分野において常に革新的な世界を発表し、日本とフランス両国で活躍を続けているレイコ・クルックさんからの、グローバルな一線

で最上のものを創り出すというその確固とした哲学と熱い言葉を贈りたい。

——私の始めた特殊メーキャップの仕事は、当時のフランスにはまったく存在しない分野でした。ですから私には師匠も流派もなく、まったくの我流でスタートせざるをえなかった。自由な発想、といえは聞こえはいいですが、それを周囲に認めさせるために、ずいぶんすったもんだしたものです。

フランス人も日本人同様、肩書きや経歴を考慮します。しかしそれ以上に、実力の有無を見極めようとしてくれる。たとえ最初に衝突しても、いいものだと納得すれば、全面的に任せてくれますが、厳しい面もあります。独自性と創造性を失わないために、私は七転八倒してきました。そしてその戦いは、今もずっと続いています。

干潟の海で泥んこ遊びをしていた子が、地球の裏側、パリはセーヌの河岸に流れ着き、ショウビジネスの神々に楽しく遊んでもらった……。長崎県諫早に生を受け、1970年代にパリにきたレイコさんは、自らの来し方をそんなふうに表示する。そして彼女はこの地で、メタモルフォーズ(変身)という概念をわが物とした。

——演出家は、ドラマを構築し、ストーリーを創り、役者はその中の人物を体現する。そんな役者たちの変身に加担して、できるだけ高く飛んでもらうように必死に工夫するのが、私のような変身術師の仕事です。メーキャップという仕事の範疇から大いにはみ出してしまった私の仕事を、だからメタモルフォーズ(変身、変容)と呼ぶことにしました。

日本語の化粧という言葉に、私は魅かれます。それにあたる英語のメーキャップとも、フランス語のマキヤージュとも違う。すごく素敵な言葉です。メーキャップは、メイク・アップ。質や形を、高いところへ上げていく。でもいつかは天井に頭がぶつかって、イメージーションがしぼんでしまう。そしてマキヤージュは、隠すというネガティブな意味があります。

それに対して化粧は、「化ける」でしょう。限界がない。<変身>は肉体はもうさん、心までもく変心>させて、超自然的に世界へ飛翔する。それが、メタモルフォーズなんです。

### Pianos Balleron Sarl

住所: 14 /16, rue Jean Bologne  
75016 PARIS  
TEL: 06 16 33 35 07  
http://www.pianos.fr/jap/home.html  
(日本語)

1. 工房経営者のシルヴィ・ファンソンさん(右)と、岡安 明子さん。2. 壁に立て掛けられ、修復を待つグランドピアノ。多くは黄金時代と呼ばれた1925～35年頃に製作されたものだ。
3. メインの作業場。弦の張り替えなどの大仕事はファンソンさん、細かい修復や調律は明子さんと、役割分担が決まっている。
4. 修復を終え、新たな持ち主を待つピアノたち。

